

最後まで美脚にこだわり…朱里エイコ苦闘の晩年

「100万ドルの脚線美」が「10円」に落ち込んだ時期も

「北国行きで」などのヒット曲で知られ、先月31日に心不全のため急死した歌手、朱里エイコさん(顔写真、享年58、本名・田辺栄子)の遺体が4日、荼毘(だび)にふされた。パワフルな歌声、スラリと伸びた「100万ドルの脚線美」で鳴らした往年の活躍に比べ、近年は寂しい日々だったよう。それでも細々とステージを続け、最後まで「脚だけはきれいに見せたい」とこだわっていたという。



朱里さんは都内の私鉄沿線から徒歩20分、築20年以上の公営住宅に十数年前から住んでいた。数年前からは40代とみられ、「たあちゃん」と呼ばれる男性と同居。寝室でパジャマ姿のまま亡くなっている朱里さんを発見したのもこの男性だった。

「枕に突っ伏すような状態で死後数時間たっていた。事件性はないと判断したが、男性は動揺が激しく話を聞ける状態ではなかった」(警察関係者)。周囲にはこの男性と「いつか結婚したい」と語っていたという。

昭和40年代、「北国行きで」「ジェット最終便」などで「紅白」に出場する一方、米ラスベガスやニューヨーク・カーネギーホールでのショーも成功させ、リンゴ・スターやポール・アンカなどからも「リトル・ダイナマイト」と愛された。



歌唱力だけでなく、「100万ドル」と称された脚線美 = 写真 = には当時1億円
の保険がかけられるなど、熱い視線を浴びた。

だが、約15年前から心臓と肝臓を患い、入退院を繰り返す生活。年に数回は都内のライブハウスなどにも出演していたが、薬の副作用からか体がむくみ、全盛時45キロだった体重は60キロ以上に。

「ここ数年はステージで『100万ドルの脚が10円になってしまいました！』とスカートをまくってギャグにしていたが、本当は悩んでいた。主催者から『あの朱里エイコじゃない。帰れ』と怒鳴られたこともあったそうで、あのときは相当落ち込んでいた」(知人)

それでも、「いつもきちんとした衣装を用意してきた」(音楽関係者)といい、母親で日本を代表する舞踏家・朱里みさをさんが正座をさせず、専用のイスなどではぐくんできた「脚」には気を使っていた。

「座敷でも正座はしないし、靴も常に高いヒール。脚がスリムになるから自転車に乗っているって。やっぱり『朱里エイコ』だなんて」(同)

しかし、その後も体調は悪化し、「1曲を歌い切るのがやっとで、歌うたびにイスに座りこんでいた」(関係者)という昨年6月のステージを最後に「引退」表明も。

自宅周辺の住民も「付き合いはほとんどなかったが、派手な服装で彼女と気づいている人も多かった。最近買い物に出かける姿もほとんど見かけず、金のやりくりで苦労しているのではと思っていた」という。

そして、「亡くなる一週間前、突然電話があって、『仕事があったらちょうだいね』『やっぱり歌を歌いたいの』と」（芸能プロ社長）。

朱里さんの葬儀は行われなかったが、遺体は埼玉県内の葬儀場で十数人の近親者によって荼毘にふされた。合掌ー。

ZAKZAK 2004/08/05